

親子クイズ 550

Q 四角の中にアルファベットや記号を入れて下さい。色のついた部分を順に並べると英単語になります。(記号も一文字と数えます。)

- ①引越しのこと。3月後半から4月前半はピークだそうです。
②3月は卒園、卒業の時期です。
③ひな祭りは女の子のためのお祝いの日です。
④3月17日はアイルランドの祝祭日。
⑤3月14日は何の日?

応募締切/3月12日(月)必着
あて先/〒783-8501 南国市大堀甲2301
賞品/正解者の中から抽選で、5名に図書カード(1,000円)を贈呈

★応募総数/117通 ★正解率/98%

親子クイズは、広報委員が毎月順番に考えています。

【第549回解答】

不言実行

【第549回当選者】

- 武市昌也 (大堀甲)
渡辺渚月 (大堀甲)
井上幸雄 (稲生)
小串千勢 (稲生)
澤村千江 (十市)

市民からのお便り

(親子クイズ)今年も楽しいクイズを作って下さいね。

南国市くらしのガイドを発行します!

このたび南国市くらしのガイドの2018年版を発行することになりました。南国市くらしのガイドは南国市で暮らしていく方々のためのガイドブックです。制作費用は、紙面に掲載する事業所や団体の広告収入で賄うため、市の経費負担なしで発行します。ぜひ、お読みください。

※南国市くらしのガイドは、各戸に4月頃に配布予定となっています。製本・配布業者は株式会社サイネックスです。



この画像はイメージです。一部変更があります。



市民からのお便り

(親子クイズ)親子で協力して考えました。楽しかったです。

なんこく歴史散歩

第62回

幕末維新の南国 一坂本龍馬像を建立した入交好保

入交好保は国学者入交好徳の長男として明治36(1903)年、南国市田村に生まれました。大正15年、早稲田大学法学部二年生の夏休み、かねてから坂本龍馬の偉業に感銘を受け敬服していた好保は、「県下の青年に呼びかけて、青年のみに手によって龍馬の銅像を作ろう。作るからには日本一大きいものを作ろう。」と思い立ち、海南中(今の小津高校)で同級だった京大生の土居清水(十市)、朝田盛(野田)、信清浩男(新町)に相談。直ちに「坂本龍馬先生銅像建築会」を結成しました。そこで、東は甲浦、西は宿毛まで自ら足を運び、直接青年団に呼びかけ支部を全県下に広げていきました。旅費もなかった好保たちは、高知鉄道を口説いて無賃乗車券を貰ったり、野村茂久(高知県交通の創始者)に「この青年の一行を乗せてやれ」と書いた名刺を貰い、知人の家に泊めてもらいながら、三週間で精力的に全県下を奔走しました。その後、四人は京都太秦に坂東妻三郎を訪ね、坂本龍馬の映画の制作を依頼しました(当時は無声映画)。シナリオを書くことになった好保は、龍馬の生前の生きた話

を聞くために、往年の陸援隊副隊長でその後宮内大臣となった田中光顕を静岡に訪ねました。銅像建設のあらましを説明すると、「坂本もなんぼか嬉しかろうのう。活動写真も作るか、そりゃ見たいのう。」といって86歳の光顕はとても喜ばれたそうです。昭和2(1927)年12月に好保は宮内庁から突然呼び出しの電報を受け、秩父宮から龍馬像建設に対し二百円の御下賜金を頂きました。その陰には光顕の働きかけがあったことは言うまでもありません。このことが報道されるや、県も全県下の青年団に号令をかけて寄付金を集めるようになり、また、4人の学生の出身校である海南中の350人ほどの生徒たちも高知市を隅から隅まで寄付を集めて回ったりするなど、各方面から寄付金が殺到するようになりました。このようにして集まった寄付金はなんと二万五千七百円(現在の八千万円程度)でした。銅像は長崎で撮影された写真を基に、宿毛市出身の本山白雲の手によって昭和3(1928)年5月に東京で完成。貨車で東海道を下り、神戸から浦戸丸で高知桟橋に着き、桂浜へ到



桂浜の坂本龍馬銅像

訂正とお詫び
前月の広報なんこく2月号のなんこく歴史散歩第61回につきまして、誤りがありました。お詫び申し上げます。訂正箇所は左記のとおりです。
訂正箇所
誤 三河国(静岡県)
正 三河国(愛知県)
問い合わせ
生涯学習課文化財係
8880・6569

ふれあひしながこて 82 人権学習シリーズ
昨秋、歴史遺産を見学する機会があった。通勤の道すがら見たことのある、通称「土盛り」の跡、戦時中には四十もあつたという。掩体壕は飛行機を覆い隠すため、コンクリートのほか、木、竹、土等で作られた。
現在残っているコンクリート製の壕のつは、土を盛り上げて形を作り、子どもや地域住民などが踏み固め、その上にコンクリートを流したという。五十センチメートルもの厚さがあり、簡単には取り壊すことができません。
手結では、震洋隊慰霊碑を見学した。震洋とは第二次世界大戦中、海軍の開発した特攻兵器の名称である。ベニヤ板で作られたモーターボートの船先に爆薬を搭載し、搭乗員が操縦して敵の艦船に体当たり攻撃をしようとするものであった。
手結に配置された震洋二八部隊は一九四五年八月二六日、出撃命令が出、その準備中に爆発事故があり、他の艇も連鎖的に爆発し、搭乗員、整備員など百十一名もの人々が亡くなった。
なぜ、戦争が終結した翌日に、なぜ、準備中に爆発が、など、犠牲者の多さへの衝撃と共に多くの疑問が湧く。軍隊の武装解除が遅れたこ

コンクリートとベニヤ板

と、艇からガソリンが漏れているとの報告があつたが無視されたらしいことなど、未解明な部分が多いとはいへ、理不尽な理由が重なっている。物資不足の折にもかかわらず、飛行機のためには分厚い鉄筋コンクリートの掩体壕が作られたが、人が乗る震洋は薄い板で造られ、他艇の爆発で引火するような状況にあつた。戦争に於いて、人の命がどの様に扱われていたのか、私たちの身近な戦争遺跡・慰霊碑は雄弁に教えてくれる。身近にあり、見過ごされてしまいがちな戦争遺跡が、現代の私たちに人の命や人権の大事さを教えてくれる貴重な存在であることを痛感させられる一日であつた。若い世代をはじめ多くの人が、気軽にこうした体験が持てるよう皆で知恵を出し合い、過去の教訓を生かしていければ、と思う。

\*このシリーズはあなたとあなたの周りにいる人の間に温かなつながりが生まれることを願ひ、人権について考えるきっかけになることを目的としています。
問い合わせ
人権啓発広報委員会
8880・6569